

氏 名	王 凱男
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	文 学
学位授与番号	博甲第 7179 号
学位授与の日付	令和 6 年 9 月 25 日
学位授与の要件	社会文化科学研究科 社会文化学専攻 (学位規則第 4 条第 1 項該当)
学位論文の題目	現代日本の若者の自然会話における性差 —フィラー、応答詞、接続詞、ぼかし表現の使用実態を中心に—
論文審査委員	教授 堤 良一 (主査) 教授 宮崎 和人 准教授 中東 靖恵 准教授 片桐 真澄

学位論文内容の要旨

言語は、社会の鏡として、その使い方は時代、文化、社会的地位、ジェンダーによって変化する。この多様性は、言語を通じて社会的アイデンティティと役割が構築される過程を理解する手がかりを提供する。特に、ジェンダーに関する研究は、言語教育においても重要な位置を占めている。

これまでの言語学研究では、主に書き言葉におけるジェンダーに関連する表現が分析の対象とされている。作文、小説、テレビドラマの台詞など、特定の文脈での使用が主な対象である（中田、1989；小川、1996；黒須、2008 など）。しかし、日常の自然会話（話し言葉）においては、フィラー、応答詞、接続詞、ぼかし表現といった、まだ十分に研究されていない言語現象が数多く存在する。これらの要素は、話し手の思考や感情の表出、社会的関係の構築に重要な役割を果たす。

また、言語使用とジェンダーに関する先行研究は、主に 1990 年代や 2000 年代のデータに基づいて行われた研究である。テクノロジーの進化、ソーシャルメディアの普及、文化的変化は若者のコミュニケーションスタイルに影響を与えており、必ずしも過去の研究結果が現代にも適用できるとは限らない。新しいデータで変化を捉えることは、現代の言語使用の実態を明らかにするのに有用である。

さらに、近年の社会言語学の研究では、会話は単なる言語行為の集まりではなく、参加者間の心理的および社会的な相互作用の場として捉えられている（定延、2000；石黒、2008）。この観点から、会話中の言語選択は、話し手の社会的アイデンティティや心理状態に影響されるだけでなく、聞き手の性別、年齢、社会的地位などの要因によっても形成される複雑なプロセスと理解されるべきである。

そこで、本研究は、現代の日本人の若者を対象に、自然会話中におけるフィラー、応答詞、接続詞、ぼかし表現など、これまであまり注目されていなかった言語現象の使用実態と性別との関連を詳細に調査する。この分析にあたり、話し手および聞き手の性別が言語選択にどのように影響を与えるかを具体的に検討する。さらに、その背後にある社会的性役割期待および文化的要因を明らかにすることを目的とする。

本研究の構成は以下の通りである。

第 1 章では、本研究の目的と構成について述べた。

第 2 章では、ジェンダーによる言語使用の違いや社会的性役割期待に関する理論と既存の研究を概

説した。これにより、研究の理論的基盤を固め、分析の方向性を設定した。

第3章では、調査データと研究方法を詳述した。

第4章では、フィラーにおける性差について調査を行った。その結果、フィラー全体を見ると、男性は女性より多くフィラーを使用すること、先行研究で議論のあった女性的フィラー「ナンカ類」は男女差にかかわらずほぼ同じ頻度で用いられること、「マー類」は男性によって多く用いられること、聞き手の性別の影響について、男女のフィラー全体の使用頻度に、聞き手が同性か異性という違いは関わらないことが明らかになった。

第5章では、応答詞における性差について考察した。その結果、「はい」と「いや」が男性に、「うん」が女性により多く使用されること、また女性の話し手が同性の聞き手に「うん」を、異性の聞き手に「はい」と「いや」を多用する傾向があるのに対して、男性の話し手は聞き手の性別による応答詞の使用の変化がほとんど見られないことが分かった。

第6章では接続詞の使用における性差を調査し、話し言葉における接続詞の平均使用回数では男女差がみられないこと、男性が同列と対比の接続詞を、女性が逆接の接続詞を多用する傾向があること、男女の接続詞の使用はともに聞き手の性別と関わらないことが明らかになった。

第7章では、ぼかし表現の使用における性差を調査し、女性が男性よりもぼかし表現を多用することが確認され、これが社会的期待と一致することを示した。特に「とか」と「みたいな」の使用において女性が男性よりも多い傾向にあること、男女ともに、ぼかし表現の使用は聞き手の性別と関わらないことを指摘した。

第8章では、発話の長さ、話題転換および割り込みの頻度の三つの方面から、コミュニケーションスタイルと社会的性役割期待との関連を検討した。その結果、男性は女性よりも発話の長さが長いこと、話題転換では男性が女性よりも多い傾向にあること、男女はともに同程度の頻度で割り込みを使うことが明らかになった。また、性差がコミュニケーションスタイルに反映される背景には、社会的性役割期待が深く関与していることを明らかにした。

最後の第9章では、本研究のまとめ、問題点および今後の課題について述べた。

先行研究において、性別に基づく言語行動の差が減少しているとの指摘があるものの、本研究では、その減少傾向の中にも、社会的性役割期待が依然として言語表現に強い影響を与えていることが見て取れる。しかし、その影響は過去に比べて相対的に減少しているという点については、本研究は否定しない。具体的な言語現象に焦点を当てると、本研究の結果において、応答詞を除き、聞き手の性別が話し手の言語行動に大きな影響を与えていないことが明らかになった。この点は、性別役割に対する社会的期待が変化していることを示唆しており、ジェンダーの社会構築性についての理解を深める一助となる。

論文審査結果の要旨

日時：2024 年 7 月 3 日（水） 14:30-16:30

審査員：堤良一教授（主査）、宮崎和人教授（副査）、中東靖恵准教授（副査）、片桐真澄准教授（4 号審査員）

場所：2-4 セミナー室

審査会の概要：

まず申請者本人から 20 分程度、論文に関する概要及び業績についての説明が行われた。続いて、副査 2 名、専門分野に近い教員 1 名から質疑応答が行われた。最後に主査から質疑応答を行った。

評価された点は以下のとおりである。

- ・論文の構成が全体的に明解な文章で論理的に説明されておりわかりやすい。
- ・発見されている事実が多岐にわたっており、統計的な手法を用いて事実を確定させており、説得力がある。

質疑はすべて適切に行われ、活発な議論がなされた。一方、次のような点が問題点として指摘された。

- ・男女差を見るために、人間関係を既知のみに絞ってしまったために、本論での結論が包括的なものになっていない。職場での日本語など、様々なデータを見るべきだったのではないかな。
- ・ジェンダー研究について、昨今は非常に研究が進んでおり、また手法も変わってきている。にもかかわらず、引用されている先行研究が古い。そのことが本論の結論に影響を及ぼしているのではないかな。「本質主義」ではなく、昨今のトレンドである「構築主義」について言及するべきであった。
- ・最新の会話を扱うと言いながら、扱われているデータが古いのではないかな。自ら最新の会話データをとるべきだったのではないかな。
- ・なぜ男性はまとめるのかについての考察が弱い。今後の課題にせず本論で取り組んでほしかった。
- ・全体が性役割期待という概念に頼りすぎた説明になっている。
- ・予備論で扱われていた親疎についての議論が削除されているのはなぜかな。
- ・8 章のみ、聞き手の性別を調査しないのはなぜかな。
- ・他言語の状況も視野に入れるべきである。

以上のような点を踏まえて、審査会終了後に可否判定会議を開催した。

上記のような問題点は多々あるものの、その全ては今後の課題として新たな研究テーマになるものであり、本論文の価値を損ねるようなものではないことが確認された。また、研究者としての能力も育っており、統計の能力、文献や情報を収集する能力、ひとりで研究者として独り立ちできることも確認された。最終的には審査員全員が、本論文を合格と判定した。